連載

農村生活のすすめ

第17回：「対馬サマースクール2019」について

主席研究員　川井　真

目　次

１．対馬サマースクール開校までの軌跡
２．対馬サマースクール2019のコンセプト
３．対馬サマースクール2019のプログラム
４．対馬サマースクールをふりかえって

１．対馬サマースクール開校までの軌跡

2017年の初秋、対馬市との持続可能な「しまづくり」に向けた研究事業、すなわち農山漁村地域の内発的発展モデルに関する実証主義的研究（以下、対馬プロジェクト）が開始から５年目を迎える頃、明治大学の土屋恵一郎学長による「対馬に明治大学の分校をつくろう！」という提案で始まった「明治大学対馬常民大学校」の設立構想は、地方創生における都市部総合大学の役割を再考し、対馬プロジェクトをより実効性のあるものへと再構築するための重要な契機となった。この学内に生じた新たな潮流は、対馬に同行してくれた多くの明治大学生たちが創り出したムーブメントであるといっていい。

その後、対馬市と明治大学は新たな域学連携のスタイルを模索しながら、関係強化に向けた具体的な取組みを矢継ぎ早に展開してきた。2018年３月には対馬市と明治大学自動運転社会総合研究所の連携協定が締結され、同年８月には土屋学長ならびに教学企画事務担当者が対馬を訪問、対馬市ならびに地域住民との親交を深め、さらに同年11月の明治大学アカデミックフェスでは「自動運転と社会変革」をテーマに対馬の未来構想が報告されるなど、両者の関係は深化している。そして土屋学長の描く対馬分校構想は――対馬プロジェクトに連動しながら――約２年の歳月を経て、2019（令和元）年９月９日に「対馬サマースクール2019」として大きな一歩を踏み出すことになった。

地域に根ざした生活者が自主的に学び、民衆文化を創造する共学の場を目指した常民大学という思想的自立のための運動も、時代の変遷による社会環境のドラスティックな変化に伴い、その役割と存在の意味が失われつつある。周知のとおり、地方都市とりわけ農山漁村地域ではすでに高齢化はピークを迎え、その一方で若年層の流出を抑えることもできず、高齢社会という構造が固定化されたまま人口減少が加速している。すなわち「消滅可能性都市」[1]の定義で指摘されるとおり、多くの農山漁村地域では健全な世代交代の仕組みが瓦解し始めているのである。

また対馬プロジェクトが内包する「まちづくりの思想」には、成長や発展という言葉の傍らに、つねに持続可能性というキーワードがセットされている。衰退する農山漁村地域

1　人口流出と少子化が進行し存続が危惧される自治体をいい、その定義としては「2010年から2040年にかけて、20～39歳の若年女性人口が５割以下に減少する市区町村」とされている。

が負のスパイラルから抜け出し、その場所に住まう人々の暮らしが持続可能であるために、解決すべき喫緊の課題は多々あるが、最も重視すべきテーマのひとつに教育基盤の再構築があることは疑いようのない事実である。産業を再生することも、新しい交通システムを提案することも、そして医療体制を整え地域包括ケアシステムを創造することも、健全な世代交代がなされることを前提に検討すべきテーマなのである。ここに対馬プロジェクトと明治大学対馬常民大学校の思想が融合する。

しかしながら、この二つの活動（思想）を融合させるためには可謬主義的なスタンスで成果を検証せざるを得ない、いくつかの問いが湧き上がってくる。これらの問いの答えを導くためには、まず仮説のもとで実践し、起こった事象を慎重に観察していくこと、すなわちアブダクション[2]のような仮説形成型の論理的推論を行動の前提に組み込み、しなやかに修正を加えられるような実証主義的研究であることが求められてくるのである。若年層の人口流出を抑制しながら健全な世代交代の仕組みを再生し、持続可能な未来をデザインしていくために、まず何をすべきなのか。歪な人口構造を呈する現代社会において、日本古来の生活様式や民衆文化の基層に埋め込まれた自然共生や共存共栄の思想を継承し、それを再創造していくのは誰なのか。また、この２つの問いへの回答が結びつくことでそこに新たな価値は創造されるのか。さらには、常民大学の思想を受け継ぎながら、それを21世紀という時代に適した構造へとつくりかえていくことは、はたして可能なのか…といった問いである。二つの思想を融合させ、そこから新たな価値を創造するための研究仮説、まさに対馬プロジェクトを再構築し、それを推進するための仮説を導くための探究の日々が始まったのである。

２．対馬サマースクール2019のコンセプト

このような葛藤を経て、二つの思想の核心を押さえながら重なり合う部分を丁寧に抜き出し、それを具体的な問題解決型学習（PBL：Project Based Learning）のプログラムの中に組み込むことで姿を現したのが、まさに「対馬サマースクール2019」（以下、サマースクール）のコンセプトであった。

サマースクールは対馬市が主催して2019（令和元）年９月９日～９月17日までの８泊９日のスケジュールで開校し、プログラムの内容は以下のとおりである。初年度の主題は「地方創生とSDGs～持続可能な未来をデザインする」であるが、参加した学生たちにはプログラム全体で伝えようとしているひとつの価値観を――対馬に生きる人々の営みから、また若き移住者たちの語る言葉から、彼らが大切にしているもの、守ろうとしている

（図表１）対馬サマースクール2019プログラム

※実施日程：令和元年9月9日（月）～17日（火）【8泊9日】 参加人数42名

9月9日（月） ・羽田～福岡～対馬 （午後到着予定） ・オリエンテーション、観光 宿舎（厳原町：ホテル東横イン厳原）	9月14日（土） ・午前：地域商社・物産店イベント運営 ・午後：物産店イベント運営・真珠工芸体験 宿舎（上対馬町・ホテル東横イン比田勝）
9月10日（火） ・午前：下島観光（白嶽・豆酸崎ほか） ・午後：地域商社・物産店イベント準備 宿舎（上対馬町：ホテル東横イン比田勝）	9月15日（日） ・午前：社協との意見交換（豊玉社会福祉協議会） 貝ロビアパーク作業（地域包括ケア拠点） （倉庫の移設・案内板づくり・ソバの作付け） ※貝口地区の方々と昼食づくり・懇親 ・午後：貝ロビアパーク作業（地域包括ケア拠点） 貝口まかないBBQ（神話の里） 宿舎（上対馬町・ホテル東横イン比田勝）
9月11日（水） ・午前：講演・視察（ヤマネコ稲作研究会・大石農園） ・午後：講演・視察・ディスカッション（対馬病院） 宿舎（上対馬町・ホテル東横イン比田勝）	
9月12日（木） ・午前：体験・住民交流（老稚園・地域包括ケア事業） ・午後：企業CSR現場視察・林業再生（舟志の森） 宿舎（上対馬町・ホテル東横イン比田勝）	9月16日（月） ・午前：天日による塩づくり視察・講演（赤島） ・午後：シーカヤック体験（あそうベイパーク）・温泉 宿舎（上対馬町・ホテル東横イン比田勝）
9月13日（金） ・午前：講演（フラットアワー・持続可能な漁業） ・午後：アカデミズム界を飛び出した生態学者の講演 （一般社団法人対馬里山繋営塾代表理事） 講演（もやいの会・ソーシャルキャピタル） 上対馬漁協との懇親・BBQ大会 宿舎（上対馬町・ホテル東横イン比田勝）	9月17日（火） ・午前：渡海船・海幸彦（浅茅湾クルーズ） 和多都美神社・烏帽子岳観光 ・午後：全体総括（対馬市役所会議室） ・対馬空港～福岡経由～羽田

2　現象を最も適切に説明できる仮説を形成するための推論で、帰納法や演繹法に加えるべき第三の推論法としてプラグマティストのＣ．Ｓ．パースがアリストテレスの論理学を継承・進化させる方向で考案した。人間の持つ想像力に大きな期待を委ねた推論法である。

（図表２）対馬サマースクール20項目の着眼点

地方創生と SDGs

～持続可能な未来をデザインする～

1. 対馬の地域医療体制について考える
2. 対馬における地域包括ケアのあり方について考える
3. 子どもたちの教育環境に思いを馳せる
4. 若年層の流出と廃校問題について
5. 都市部の総合大学にできることは何か
6. 地域への大学の関与と大学間連携の必要性・可能性について
7. 農業の重要性と可能性～これからの農業のあり方を考える
8. 漁業の重要性と可能性～これからの漁業のあり方を考える
9. 林業の重要性と可能性～これからの林業のあり方を考える
10. 地域商社の可能性と将来展望について
11. 第一次産業を核とする CSV(共有価値)について考える
12. 人の移動について～公共交通システムの重要性について
13. 対馬における観光戦略について～話題の MaaS とキャッシュレス化も視野に
14. 対馬における Society5.0～AI・IoT・自動運転の可能性について
15. 生きること・働くこと・暮らすことについて再考する～新しい働き方を考える
16. 再生可能エネルギーの活用について
17. 対馬における産業のあり方と将来展望について
18. 対馬の風土と生態系～歴史的価値と文化的価値を再考する
19. 市役所の役割について考える
20. 資本主義と民主主義を再考する

ものが何かを手掛かりに――掴みにいってもらい、それを20項目の着眼点で考察してもらうことにした。非日常的な体験を通じて、思考のＯＳを再起動させ、それにより社会の背景にある精神世界（心の世界）を五感＋αで感受できる能力を養ってほしいと、事前のオリエンテーションで説明している。

余談になるが、今年のサマースクールでは天候によるハプニングがあった。開催初日が台風15号通過の直後であったことにより、初日は予定時刻に羽田空港までたどり着けない学生が続出した。ANAの配慮により学生全員を別便に振り替えて福岡まで移動させることができたものの、９月９日は福岡で足止めされることになり、対馬入りは翌10日の早朝となった。初日のプログラムは柔軟に設計していたのでサマースクール全体への影響は最小限に抑えることができたが、はからずも離島

初日羽田空港にて

への交通システムのあり方を再考する機会となった。ところが天候によるいたずらは初日だけではなかった。最終日となる９月17日は早朝からの強風で対馬空港から福岡空港に向かう全便が朝から欠航となり、やむなくフェリーを利用して博多にわたることになった。しかしフェリーによる博多への移動は約５時間かかり、当然のことながら福岡空港で乗り継ぐはずの羽田空港行きには搭乗することができず、最終日もまた福岡で足止めされることになったのである。とはいえ、学生たちと和やかに時を過ごし、飾り気のない対話を交わした福岡でのひとときは、サマースクールに彩を添えて予期せぬ付加価値を与えてくれたように思う。

３．対馬サマースクール2019のプログラム

そこでサマースクールの意図を反映する主要な授業をいくつか簡単に紹介しておきたい。まず10日の午後と14日に組み込まれている「地域商社・物産店イベント」については、明治大学商学部の稲垣理美さんが企画したプログラムである。彼女は今年の４月から大学を１年間休学して対馬市の職員（学生研究員・島おこし協働隊）として現地で働いている。稲垣さんは２年生のときに富山県魚津市主催で開催した「魚津エクスターンシップ」

に参加してくれたのだが、それから２年以上にわたり、伊豆や対馬や三河中山間地域にも同行して研究を補佐してくれている。新たな時代の到来を予感させる、象徴的な学生である。この企画は地域の魅力の再発見と内発的な経済循環の再生を意識したもので、地域商社の位置づけと可能性を模索するために用意したプログラムである。

11日の午前中については、まず上県町（かみあがたちょう）ふれあいプラザという公民館をお借りして、絶滅危惧種に指定されるツシマヤマネコの生息環境を取り戻すため、豊かな生態系を保全する自然共生的な農業（田畑づくり・山づくり）を佐護（さご）ツシマヤマネコ米の生産を通して実行している「佐護ヤマネコ稲作研究会」[3]の取り組みを、この活動を支援する――若い移住者たちが中心となって組織した――「一般社団法人MIT」[4]代表理事の吉野元さんに紹介していただいた。活動報告をしてくださった吉野さんの経歴もユニークで、東北大学大学院で博士号を取得したのち環境省自然局に入職し、その後、環境コンサルティング会社で経験を積み、現職に至っている。対馬という国境離島から地球規模の環境問題を語り、行動することのできる逸材である。

吉野元さんの講義風景

これに続けて、対馬紅茶を栽培する茶園をひとりで開拓し、完全無農薬にこだわり続けて「べにふうき」というヒット商品を生み出し、その後も精力的に新商品の開発に取り組んでいる「大石農園」[5]の事業と信念について、代表を務める大石孝儀さんにお話しいただき、その後、大石さんご本人の案内で茶園を視察した。

大石農園の茶園にて

この日の午後には対馬の地域中核病院である「対馬病院」[6]を訪ね、院長の八坂貴宏さんの講演ならびに学生たちとのディスカッションのあと、院内の視察を行った。高度医療を提供できる病院が島内には一つしかないため（対馬の面積は708.66㎢で、南北の距離は約82kmにも及ぶ）、対馬病院の担う役割は多く、地域医療全体を俯瞰するうえでも参考になるお話を伺うことができた。

3　佐護ヤマネコ稲作研究会：http://www.yamanekomai.com/index.html
4　一般社団法人MIT：https://sustainable.mit.or.jp/
5　大石農園：http://tsushimaooishinouen.jp/index.html
6　長崎県病院企業団　長崎県対馬病院：http://www.tsushima-hospital.jp/

対馬病院での講義風景

12日は午前から昼食をはさんで午後２時頃までの間、「老稚園　いいとこ」の園長である辻清美さんの活動に参加させていただいた。辻さんの運営する「老稚園」は「幼児には幼稚園があるように、老人にも気軽に食事をしたり、遊んだりする交流の場が必要」という思いから、すでに20年ほど前から地域のご老人たちが集う憩いの場を提供している。公的補助を一切受けず、社会福祉協議会と連携しながら利用者の健康管理や介護予防のプログラムを取り入れ、また「まほろばの里　ももたろう」という食堂を拠点に昼食はボランティアスタッフ（支援者）の手作り料理で食卓を囲む。まさに地域包括ケアのモデルともいうべき活動を展開しているのである。

老稚園での集合写真

次に向かったのは「舟志（しゅうし）の森」で、ここは住友大阪セメント株式会社がツシマヤマネコの保護を目的とした森づくりのため、2007年２月より長崎県対馬市舟志地区に所有する森林約16ヘクタールを無償で地域に開放し、対馬市ならびに地元住民と「舟志の森づくり推進委員会」を立上げ「モデル林づくり」を行っている場所である。この産官民協働の取り組みの現場を、一般社団法人対馬観光物産協会所長の玖須博一さんの案内で視察した。

「舟志の森」の視察

13日の午前は合同会社フラットアワーの代表社員である銭本慧さんに講演をお願いし、移住者でもある銭本さんが漁師という職業を選択するに至った経緯や、合同会社フラットアワーの目指す漁業の姿を語っていただいた。銭本さんは東京大学で環境学博士（海洋物理学）を取得したのち研究者となり、マリアナ諸島西方の海域で――世界で初めて――天然のウナギ卵を採集した研究チームのメンバーであったことでも知られるが、その彼がなぜ、対馬に移住して一本釣り漁師という道を選択したのか、大変興味深いお話を聞くことができた。

そしてこの日の午後には、まず人と人を結び地域を活性化したい、という思いが交響して結成された「もやいの会　佐須奈（さすな）」の活動

銭本慧さんの講義風景

を、代表を務める日高光博さんにご紹介いただいた。「もやいの会　佐須奈」では高齢者の見守り活動、国県道や港の掃除、絶滅危惧種に指定される「ツシマウラボシシジミ」の保護活動などの他、社会福祉協議会のふれあい学習や公民館講座を活用して草木染などの文化の伝承も行っている。人口減少社会におけるソーシャルキャピタルの重要性を再考し、また農山漁村地域における地域包括ケアのあり方を考えるうえにおいても、示唆に富んだ講演であった。

これに続けて、一般社団法人対馬里山繋営塾[7]代表理事で対馬グリーン・ブルーツーリズム協会事務局長の川口幹子さんに講演をお願いした。川口さんは北海道大学水産学部から同校環境科学院に進み環境科学の博士号を取得して東北大学生命科学研究科・生態適応グローバルCOE特別研究員となった人物であるが、その後、地域おこし協力隊制度を利用して対馬へと向かい、対馬市島おこし協働隊生物多様性保全担当を約３年間勤めたあと、移住という選択をした。その行動の背景にある彼女の思いを、現在の取組みの紹介とともに語っていただいた。

日高光博さんの講義風景

川口幹子さんの講義風景

15日は終日、貝口（かいぐち）地区の住民たちにより推進される「貝口ビアパーク・プロジェクト」に参加した。ここ数年、対馬プロジェクトでは地域包括ケアのモデルづくりとして厳原（いづはら）市街に近い久田（くた）地区でアグリパーク・プロジェクトを推進してきたが、この場所を見学に訪れた――対馬市の中でもとりわけ高齢化率の高い――貝口地区の住民たちから「自分たちの集落も100歳まで生きる元気な高齢者地域を目指そう！」という声があがった。まさに「貝口ビアパーク・プロジェクト」は、「貝口住民の、貝口住民による、貝口住民のための居場所づくり」を目指した、住民主体の「地域包括ケアのまちづくり」なのである。「ビア

7　一般社団法人対馬里山繋営塾：http://www.satoyama-keieijuku.com/

「貝口ビアパーク」案内板づくり

「貝口ビアパーク」に面した入り江

「貝口ビアパーク」案内板づくり

貝口まかないBBQ

パーク」という名称には、活動拠点となった遊休農地が静かな入り江に面していることから、浜辺（ビーチ）で遊び、農業（アグリ）とふれあうために、誰もが気軽に訪れることのできる公園（パーク）にしたい、という願いが込められている。

「貝口ビアパーク・プロジェクト」は、当初は住民の居場所づくりを目的に始動したが、いまでは都市部から訪れる大学生の学びの場にもなっている。彼らは山川草木とふれあい、共同作業を経験し、地元高齢者との対話を通じて、人間としての成長を遂げている。この場所から若者と高齢者の異世代交流がはじまり、文化の継承が行われている。高齢化率65％近い小さな集落に宿った奇跡の胎動である。

４．対馬サマースクールをふりかえって

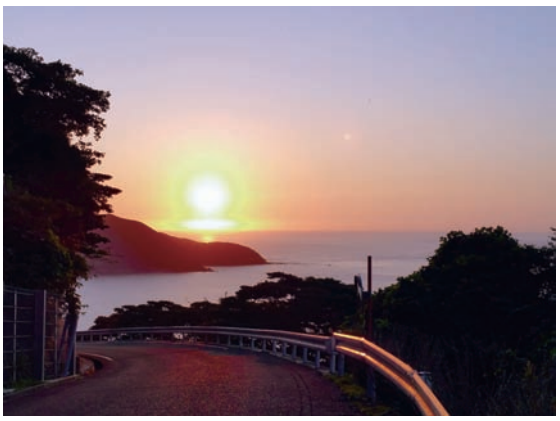
対馬プロジェクトにおけるサマースクールの位置づけは、対馬という地域に健全な世代交代の仕組みを再構築するためのアクションリサーチであり、それは「若年層人材環流戦略」の推進でもある。ここで故郷回帰の「還流」ではなく、流動を意味する「環流」という言葉を用いたことについては、それなりの意味がある。すでに対馬では、暮らしの永続性を担保するうえで必須となる社会の新陳代謝、すなわち家業を継承するための世代交代や、地場産業を地元の若者が支えていくという自然な仕組みが質量ともに限界に至っていることから、人材の確保という課題が「対馬プロジェクト」の最大のテーマになっている。

しかし定住人口というのは緩やかに増加していくもので、外部からの急激な人の流入はあり得ないし、それは別の問題を引き起こす可能性が高い。まずは関係性人口を増やしていくことが大切なのである。

都市部で生まれ育った若者たちは、日本古来の生活様式や歴史に育まれた豊かな民衆文化、そこに内包される独特なモノの見方・考え方・感じ方の根底にある平和思想や自然観などに触れる機会が少ないため、対馬という場所での出会いや体験は、彼らにとって刺激的なものだったはずである。学生たちから提出のあった報告レポートには、そのような声がちりばめられ、行間からは言葉にできない思いのようなものが伝わってくる。したがって若い感性は、牧歌的な雰囲気に癒されたり、懐古趣味に流されたりするのではない、もっと大切なものを、的確にとらえてくれている。

サマースクールに参加した学生たちの多くは、各地域でお世話になった方々との交流を始めている。地域の方から招かれ、すでに次の訪問日程を決めている学生たちもいる。たぶん、この関係は永続的なものになるに違いない。対馬プロジェクトにおける「若年層人材環流戦略」としてのサマースクールは、明治大学対馬常民大学校の思想と融合しながら、新たな可能性を未来に提示している。

韓国展望台からの夕日



烏帽子岳展望所での記念写真

和多都美神社での記念写真

渡海船「うみさちひこ」での浅茅湾クルーズ